

「兼松成言」について

月 足 正 朗

兼松成言（石居）は、幕末から明治十年の變年に至る時期における津経を代表する碩学であり、かつ才一般の教育家である。敵愾の時代に遭遇し、一番の師表と仰がれた人物が示した思想と行動について考察してみようと思う。

一、石居と藩校、東奥義塾

十代藩主信順の参勤に伴い、父久浦と共に隨行して江戸に登つた石居は（文政九年四月、十七才）、天資聰明、二十三才の時昌平塾に入学を許され、古賀桐庵、佐藤一斎、成島翠庵、屋代輪池等の教授を受けた。博く和漢の学に通じ、詩文を能くしたので挙げられて舎長となつた。

天保六年、退官したが、同十年八月書院番（馬廻）に列し、藩士に対する経学教授を命ぜられることとなつた。（翌十一年五月屋代九十九娘しんを娶り、一家を創立）。同十三年十月（三十三才）には十一代藩主順承に侍読し、弘化三年十月からは世子武之助の侍読を命ぜられ、専ら傳育に任じたが、さらに嘉永三年順承の発意により家中の子弟に蘭学を兼修させることになり、石居はその学舎（本所割下水の旗本・稲葉氏の屋敷）の責任者として蘭書の購入、蘭学者の招聘（蘭医杉田成卿とは特に深く往来し、佐

々木元俊（後述）等を入門させた）等の職務にもかかわり、本務の手廻（嘉永三年七月十二日付）と合わせて相当の副職を遂行している。しかも自ら蘭書を学んだわけではないが斯学に対する開明的姿勢は終始変らぬものであつた。

安政三年、藩公の世嗣問題で、その血統論がいられるところとならず、帰国・蟄居を命ぜられたが、万延元年に許されて後は、慶応元年再び書院番に列し、兼ねて経学士の職に任じたが、十月「藩祖略記」を著わして藩主に上呈し、かたわら茶畑町に私塾麗沢堂を開き一般子弟の養成にも尽力した。この塾の学科は漢学・習字・算術で教師は塾頭が菊地権衛、他に四名居り、生徒は男子百名であつた（「日本教育資料」慶応二年）。この門から、一戸兵衛、小山内鉄彌、神喜洋芽、高山静（文堂）等を輩出している。

慶應二年七月藩校小司を命ぜられ、十月には「津経前譜」を完成し、戊辰の役に際しては、藩の使節として秋田に至り官軍と国事を談じ、且つまた「討南・北略記」を著わし野辺地・函館における戦況を余すところなく活写している。明治三年七月藩校習字に推され、漢学の重鎮となつた。

同四年の廢藩置県に当り、郷党の将来は、かかつて人材を養成する育英の事業にあることを痛感、菊地九郎等と相呼応し、漢・英両学聚をまとめ、これを基幹に私学校を創設する計画をたてるに至つた。旧主承昭の援助もあり、明治五年十一月二十七日、文部省から蘭学許可が与えられ、かつて、津経における文教の中心をなした稽古館の由緒ある敷地の一角に新築なつた学舎の再現をみることとなつた。（東奥義塾）

石居は先輩の名士として推されて幹事となり、職員は菊地・成

田五十穂兩副幹事のもと地元を代表する秀才三十六名をそろえるという偉説を呈した。塾は漢・英二学科の外に小学科を置き生徒凡そ四百余名であつた。同年十二月英学教師として、アメリカ人宣教師ウオルフ夫妻が招聘されている。かつて蘭学兼修を督学し、ペリー来航の時には藩兵の隊長として兵を統べた石居は、ウオルフに対し日本語を教授することとなる。然るに、漢・英二学科の教授間に意見の対立を生じ、漢学科は分離することとなり（六年十二月小学科も廃止）、石居は幹事を辞するに至つた。しかし、これ以後も定日の午後、講師として出講し、またウオルフの日本語教授を続行している。六年の春、ウオルフとの会見に際し

五大洲中皆旧姻 却洒胡越一家春

今宵各手交相握 曾是天涯对理人

と賦し、

足と足うら合せなる国人の

手と手を握る今日ぞうれしき

と詠じ彼に送つた。

なお、同八年、塾に小学科が再設、女子部が新設されると長男良、長女しほが教員として勤務しており、義塾と兼松氏との関係は一しお深いものがある。

漢学科の分離、兼松の幹事辞任は当時の各界にみられた、いわば新旧思想の相剋が表面化したことの一例と認められるが、周知のように、副幹事成田のほかに須藤寛平・寺井綱司等の教師が慶応義塾において身につけた福沢流の実学精神に加うるに、ウオルフ夫妻以後（明治七年期満ちて退弘）ジョン・イングをはじめアメリカ人宣教師が相次いで来塾、キリスト教精神をもたらし義塾

の特質を形成し進むべき方向を決定していった。石居自身はこの間に処して、上述の如き出所進退を示したのであつて、世の常の備者でなかつたことを示すものといえよう。時に石居六十三才であり、前年には宗旨を改めて伸道に帰依している。

二、石居の建言

明治新政府は諸施策の策定に当り、建白書の提出を奨励した傾向があるが（石居の建白按文）、本県においても種々の建白が出ている。例えば明治五年四月本県小参事杉山龍江の「奉」請^ニ北巡^一建言」、同六年十二月下沢保躬の「明治七年歳首天下全国に勳題を下し賜はむ事をこひ奉る建白」、同八年六月工藤寛蔵（外崎寛、時に十七才）の「立憲政体を布かれん事の建白」（三条太政大臣宛）、同十三年三月本多庸一、菊地九郎、今宗蔵、陸奥、中市稲太郎等による「国会開設の建白」等があり、同十四年六月には中津逕郡長笹森義助が「御巡幸の龍駕を津軽地方へ枉げらるるを請ひ奉る哀願書」を提出している。以上は中市を除いて何れも旧弘前藩士によるものであつたが、時あたかも自由民権運動の昂揚から激化の時期にあたり、明治政府は「人心収攬ノ必要」がさしせまつた状況にあると判断し、九年の明治天皇の東北地方を皮切りに、十一年の北陸・東海道、十三年の中央道、十四年の東北・北海道、十八年の山陽道巡幸を実施していることからみて、これらの建白が自発的になされたものか、政府の勧誘に相応じたものか、それぞれ、どれだけの直接的効果を挙げたかはさておき、本県における識者の動きも政府と民権運動の政治的競合に深くかわりを持つことになつたことを示すものといえよう。

右のような、いわば政治上の大局にかかわる建言の盛行の中にあつて、石居が明治四・五年から六・七年にかけて行なつた建言は、法律・産業・風俗習慣・人物登用等にまで及び、一代の碩学にふさわしく博識に裏づけられた合理的・革新的な内容に満ちたものであつた。石居の建言した事項を挙げてみると次の如くである。

- (1) 新律綱領への發義
 - (2) 癸田試作。歲案製造の義
 - (3) 本景の習俗について
 - (4) 種痘の妨害
 - (5) 上三 従一位三条公閣下執事一書
 - (6) 人物登用の建白按文
- 以下、本文によりつつその意図にふれてみようと思う。

(1) の新律綱領とは、明・清律を基に、わが養老律・御定書百箇条等を参照して百九十二条とし、明治三年新政府が制定したものである。建白のきつかけは、塾における講義で、石居の解説が新律と一致せぬ点があつたのを、生徒が東京の新聞社に投書したことにあつた（草案、青森権令北代正臣宛）。石居の問題として指摘した要点は

「才二等親の兄弟の子の^{をい}姪のみありて、姉妹の子の^{たもう}甥なきは如何にや。才四等親の兄弟の妻のみありて、姉妹の夫なきも如何にや。又御追改親相姦の条に、凡父祖の妾、伯叔姑とあるは、原と伯叔姑と唱るは、伯父、叔父姑を指すに以たれば、伯叔母姑と母の字を補いたらんには、^た然たるべきか。且此条を報知新聞に載たるには、伯叔姑の傍に、おち・おば・しゅうとめと

訓かなしたる、かなも違い名義も混淆して更に疑惑を起こせり」というにあり、つづけて

「伯叔母とありて、傍訓を^{をち}のめとし、姑の傍には、^{をば}とありて判然たらんが、必意徳川氏にて、天下に頒ちたる服忌令なる物、甚しき謬妄ありて^{は、か}弟^の母^をも伯父叔母などと称し、従弟と云にて、従父従母及び内外兄弟の差別なく渾称したる頗尤謬妄の至也。先此五等親を明亮に定めらるる時は、他日服令の基に成べし」

としたのである（明治六年十月二十二日、司法省宛。七年一月四日副署をそえて支庁へ再提出。）ついで同じく「新律五等親の才一等の養父母とあるは、部意切に疑ふ処あり」として

「古今の制養子たる者其家を統き、其後となる者は、即養父母を真父母と認なすなれば、別に養父母の目を掲るに及ばざるにや。又仮寧令にも「遇父母喪並解官」とのみみえて養父母を掲げず「法曹至要抄」に述べれば、祖父母の下に、養父母を加えたるは、是養を受けたる父母を指すならん。且此目も職制令を以考えれば、大宝の條には当今の如く其後となるの養子なる者はあるべからざらん歟。かかれは、此養父母なる者は、恐くは養育を受けたる者を指すには非る歟。若し養育を受けたる養父母ならには受養父母と目し、継父母と等を同うして充當ならん歟。其は説文に「婦母 己育者也」とみえ、今日の夫妻は子よりみれば、他日の父母にて、夫妻育等なるべき事は、萬國普通の義なるを夫は才一等にありて、妻は才二等にあること穩當ならざるに似たり。（下略）」

という才二の建言を提出している（明治六年十二月七日司法省宛、

才一建言同様、七年一月四日支庁へ再提出）。この五等親建言について、どれだけの反応があつたかは不明である。

(2)の秧田試作、蔵索製造の義はまず津軽地方の習いとして、苗代から苗を田に移植した後、苗代はそのままに放置されていることに着目し、その不経済であることを指摘し

「東京は勿論他県に於てもかかる所為はなきこと也。本県に於いても一証とすべきは、和徳茶畑の北方及び戊辰町の西方の田地にては、秧田を閑却せず、之に植付せり。……成言此義を旧藩の時論諫したれども、兎角吏民共に頑にして、成言が説を試る者なし、予漫に暗算するに、此県下厩境の秧田に植付なば恐らくは三万石を増穀するに過るに至らん歟」

と述べ、苗の植付実施を進言したのである。さらにつづけて、本県の人人が蔵索の利用を知らず、従つてその製造法を知らず、食料に供せられるもの以外は、徒らに野に朽ち果てさせている状況を惜み、蔵索をつくることを奨励すればとして、

「……孤児寡婦の手業ともなり、且之を大に収束ね買集る者を立て南京に輸送する時は許多の生産ともなるべき也。是等は墳細（細？）の事なれども、物を開き務を成すの一端とも謂べき歟……」

と述べている（明治七年一月十八日、弘前支庁宛）。この建言は支庁から本庁へ上申され、同二月九日採用の通知を受けた。同時に具体的方法についても建言するよう求められ、秧田試作は老農、豪農については業者の経験を徴するよう、とした（同二月十日）

(3)の本県の習俗に就いては、当時における本県習俗の実態をふまえて、その匡正すべきを述べたもので五項目にわたる。即ち、

(イ)婚姻上の弊風を正すべきこと
(ロ)剪綵花の使用を止めるべきこと
(ハ)野犬の徘徊を防止すべきこと

(ニ)未熟米・粟の刈取り、採取を止めるべきこと
(ホ)農事に新技術を導入すべきこと

以下、それぞれについて述べられている実情と対策（イ、ハ、ホ）を示してみよう。

(イ)婚姻上の弊風のこと 「兄なる者既妻を迎えたる後病死し、其弟を以嗣となし、或は兄の養子便宜なりとして、兄の妻に他氏を冒させなどして、直に弟の妻となす、往々の習俗なり、……甚野蠻の習俗にて、其実は嫂にして又養母となしたる者を蒸するは葬論を乱るの大なる者也。……既往咎めざるの義によられ、而今以後如此事無之様御布令これ有度事なり。」

(ロ)剪綵花のこと 「送葬の時剪綵花を用うる風習あり。……是に無用の甚き物也。……他の説りを得ん事を怕れて、任て之をなす者あり。……送葬及び追祭にも平常とても一切剪綵花を供する事を禁制あられ度事なり。」

(ハ)野犬徘徊のこと、「風土の然らしむるにや、地方に多く風犬ありて小児或は大人も之が為めに訓を被り殆難治に至る者往々これあり。……人家に畜う処の犬は其首に小なる牌をつけ家名を註し置べき旨を徇られ、若牌なき者をば皮を製する者に命ぜられ、見るに随ひ之を捕らしむるならば、自ら風犬も出さるに至るべき歟。」（イ・ロ・ハ、明治七年七月十三日）

(ニ)未熟米・粟、刈取り、採取のこと 「旧暦の中秋日に平米と称し、未熟の稲を刈り、煮して持き、扁平にし、之を月に供す

るの習俗あり、凡そ農民之を製せざる家なく、小なる者二三升、大戸は斗は以て収ふ。これ東京辺にては糯米と云へり。且原篤信は粃米は宿病を起し、よく脾胃を壊ると志し置たり。かかれば害ありて、更に益なく、且鹽境の米を糲する事幾何石なるを知らず。甚惜むべき事なり。これも予め禁止これあり度ことなり。……因に云、此時未熟の新米のいがの殻を付たるを併せて月に供せり。是も食する事もならざる品にて、徒らに天物を暴殄するに近し、序を以て禁止せらるるも可なり。」(年月日不明)

(ホ)農事に新技術導入のこと。「……秋月に臨みて布令あらんよりは今より景下勸農の者を上国に就て、伝習せしむるか、或は上国の老農を請い來りて指南を受けるかならば、秋收のみならず、春夏の際の播種にも必裨益を得る事あらんと考ふる故、即建言に及べる也。

先づ秋收迂遠の仕方を目撃したる処を陳せんに既に收獲の時刻たる桶を束ね五六束つづを田中に穂を上にして並べ置けり、之を土言にてシマタテと云。……其れより又田中の別処にニホと名(付)けて横置けり、是は甚大ならず、致処に作れり、然るに後設家屋辺の場所に連置して大なるニホに作れり。其崇大なる事屋に等しく、以て杜観とせり、飯令糲甲は乾きたりとも内夷は未だ潤ひあるべきをかく積み重ね置時は、必ず鬱蒸の氣あるを免ぬかれざるべし。かかるゆゑにや、東京郡下にては、津聲米はハゼ菓子を製家にては之を買ひども、販を賣く店にては腐敗しやすしなど云て、粒も堅美ならずとて之をきらへり。安んぞ知らん、鄙て方法の手順宜きを傳ざるによるならざる事を、近年醸造家にて、伊丹より酒保を備い下して稍々伊丹を模する

の酒を造る事を知覚せり。未だ聞かず、豪族の上国の老農を備い下して耕稼の事を尋問せし事を、米穀は酒の根本なるに是に心を尽すべきことをしらざるは、末に糟して、本に粗なりとも云べきにや、又或は近傍の怨みを受けし盛家にて、此ニホへ火を放たるる事往々これあり、然らずとも此辺を烟管を噛みて徘徊するなどより、過つて失火することもままあり、或は近火ありとても防政に甚不便あれども、此仕方を換ゆることに心つかざるは寔に頑愚と云うべし。」(年月日不明)

(4)種痘の妨害は弘前本町一丁目の住医佐々木元俊(蘭学者・洋式医師の草分け。安政六年稽古館に蘭学堂が設けられるにおよびその学士となる。翌七年クラメルス蘭語辞書を續刻し、「蘭語家言」として出版。文久二年より医学館の種痘館にて種痘を行ない以後明治六年までその数二万余名にのぼる。医療のかたわら後進の指導につくすこと大。)の語として、

「百沢村近傍新法師村辺より絶えて種痘に來らざる故を探討せしに、盲巫、此辺へ來り、種痘は身体に害あるなどと妄言したるより、愚民等原來この盲巫を信ずる故、種痘に來らざる也」と述べ、さらにこれらの盲巫が住民をまどわしている種々の事例を挙げ、このような妨害は速かに除かるべし、としたものである。なお、この建言の末尾において元俊の功績に対する褒賞方を上申している。(明治七年五月、青森県支庁宛)

(5)上二 従一位三榮公閣下執事書は、大政大臣の名号は復辟すべきことを上申したもので、石居の政治主権一制度についての認識を示すものとしてみるべきであらう。即ち言ひ、

「……ひそかに惟るに大政大臣名号の由り來る処を原ぬるに、昔

在親王を以知大政官事とし、又皇太子を以大政大臣となすは是
他日天位を嗣がしむ可きの人をして大政に歴試せしむる耳、故
に知る大政の政字は元是天子親政の政字なることを、伏して
准るに閣下速かに大政大臣の名号を復辟し、海の内外をして、
大政は即是天皇陛下の大政たる名実允当の事に知らしめん事を、
且其職名の如きは太丞相等の適宜の称謂あるべきなり。」と
(三乗大臣就任は明治四年七月、建白年月日不明)。

(6)人物登用の建白按文、は賢才を選挙によつて任用すべきこと
を主張したもので、石居の施政観の一端を示すものとみるべきで
あろう。即ち言う、

「……尊卑の而還尚お日浅き事故、膏下人物の賢愚御悉知これ有
べからざる事勿論なれば、今より至急各大区へ布令せられ、人
民各一己の見識を以吾勝れたりと思う処の人名を封書し各其戸
長々々へ投札させ、之を区長にて取束ね、県庁に於て開封し、
其投札人名の尤多き者一人を権参君提携して御出府あらば閣境
の民心初めて其公明なるに服従せんか……」(那須均権参事時代、
明治五年八月／九年七月のものか)。

以上、石居の建言についてみたわけであるが、つぎに、これら
の建言がなされた背景と本領について考えてみよう。

まず才一は、建言(1)、(5)にみられるように、石居がわが国古来
の法制、政治制度に深く精通し、該博な知識をもつていたことで
ある。而して時代の進展に伴つて生起してくる新体制(法令)、
並びにその内包する問題点を的確に把握し、常に事の本質に注
意を喚起しようとする態度をもつていたことである。

才二は、建言(6)にみられるように、それが施政の水準向上に貢

すると判断した場合、従来のゆきがかりにこだわらぬ、思い切つ
て斬新な方法を提示する柔軟な思考態度をもつていたことである。
才三は、建言(2)、(3)、(4)にみられるように、日常身辺に生起す
る広範な諸事象に対し、鋭い観察の眼を向けていたことであり、
而して認識しえた同題点については、その合理的解決の打開の
ための方策を常に思考していたことである。

要するに、石居が上述のような巾広い建言をなしたのには、単
なる儒者たるに留まるをいさぎよしとせず、経世済民の学として
の儒学の本質を把握し、その最晩年には津経旧記類(十五冊)の
監修者(協力者は樋口建良、下沢保躬)となつたように、修史に
よつて培われた政治の体系性と有用性の認識をもつていたことに
よると思われる。

註

(1)弘前市史明治大正昭和編 一〇六頁参照。

(2)森林助著「兼松石居先生伝」 九四頁参照。

(3)同上 九四頁参照。

(4)明治初期における津軽地方の米作技術については、螟虫の
駆除、馬耕法の採用、種籾の塩水選法等のことが図られて
いるが、この建言の示唆する意義は大きい。弘前市史前掲
編 九八頁／一〇〇頁参照。

(5)佐々木元俊の種痘普及に関する業績は、その開拓者として
の唐牛昌運・昌孝兄弟とともに特筆さるべきものである。

弘前市史藩政編 五四九頁／五五二頁、竹内運平著「佐々
木元俊先生」 一二頁／一六頁参照。